飛鳥路を訪ねて

秋も終りの十一月二十六日、われわれ日本文学研究会の一行は、臨地研究のため、晩秋の大和路を訪れるべく、午前九時京都駅に集合した。

目的地飛鳥についたのはもうすでに昼近かつた。なにかさびれたなかにも、その昔持統、文武、元明の三代が盛えただけに、重々しいものを感じさせられたのは私だけではないだろう。

美しい晩秋の大和路を行くわれわれ一行は、すつかり万葉時代に陶酔してしまつたようであつた。欽明天皇陵に向う小道の左右にある巨大な石造物（石槨か石棺が上部と下部とに分かれたもので上部を鬼の厠、下部を鬼の俎という）――このような一見何んでもないものにさえも、万葉時代の匂いがしみ込んでいると思うと感無量といつたところである。国崎、村田両先生の説明が我々を万葉の世界にひきずり込んだせいでもあろう……。

美しい晩秋の風景を満喫しながら、われわれは橘寺へと歩を進める。新藁の香りが大和路にやつてきたということを知らしめるようだ。聖徳太子誕生地、橘寺――そのくずれさつた白堊の土塀にさえも古い歴史の一つがあるのだ。また、石舞台古墳では、このような巨石をくみ合わせた古代人の能力に驚かされたことは云うまでもない。ここで一同記念写真を撮つた。

岡寺で昼食をとる。秋の終りのせいか境内には冬紅葉を訪ねてくる人は誰一人いず全く静かだつた。時折、百舌鳥のなき声が山あいから聞こえてくる。飛鳥の秋も今日で終りのようだ。食事をすませ、飛鳥寺へと急ぐ。推古天皇四年に完成したこの寺は以前、法興寺と呼ばれていたが、飛鳥にあるところから、飛鳥寺と呼ばれるようになつたそうだ。そしてこの寺には飛鳥大仏が安置されている。一見何んのこともない感じの寺であつたが、やはりこれらにも、歴史があると思うと興味深い。ひなびた飛鳥――しかしその中のすべての何ものにも、白鳳文化の影があるようだ。美しい、大和三山――香久山、畝傍、耳成が、親しみを与えてくれる。どれをみても、美しい容姿をなし、飛鳥の地にその歴史の色をそえているようだ。

×

香具山は　畝火を雄々しと　耳成と　あらそひき　神代より　かくなるらし　いにしへも　然なれこそ　うつせみも　妻を　あらそふらし

×

天の香久山に登つたわれわれは、そこから見下ろす、飛鳥の地に、目をくばり、遠い万葉の昔を想う。なんとも云えぬ、美しさだつた。そして、そこには、まだ深く秘められた、文化があるように思えた。その神秘なまでに、美しい光景に、足のつかれも忘れ放心したような気持で見入つていた。

×

春過ぎて　夏来るらし　白たへの衣ほしたり　天の香具山

×

ゆく秋を惜しむかのように、百鳥の鳴き声が、一きわつよく聞こえる。香久山を、おりたころには、三輪山にはいつしか黄昏の色が濃くなつていくのを感じた。

（奥田利彦）